バイロンの解説からみるハーン（2）

伊野家　伸一

I

本ジャーナル前号（島根大学　外国語教育センタージャーナル第８号）においては、ロマン主義への傾倒を強く示すハーン (Lafacadio Hearn) が、*On Poets* において、ロマン主義を代表する詩人バイロン (George Gordon Byron) をどのようにみているか、また、そこからハーンの如何なる面を見出せるかについて検討を試みた。

ハーンは、バイロンの “Childe Harold” について、自然美を謳歌しながらも哲学的、瞑想的であるとし、その雄大さを評価したが、その成功は新奇さゆえのものとみていた。ハーンが「読むことを勧めたい物語詩」とする “The Siege of Corinth” と “Mazeppa” についても、前者に関して、幽霊の登場とその効果という点では、かなり賛意と共感を示しているように思える。後者に関しては、物語性における素晴らしさを認め、評価していた。しかし、双方について「英国文学の伝統的な道徳観に反する。即ち、第一に犯罪が正当化されることを示唆している。第二に読者の共感が、自らの信仰や故国を否定した人物に寄せられている」と、批判を加えていた。このように、前号の拙稿において取り上げたバイロンの作品に対しては、評価とともに、推敲・検証、周到さ、道徳性といった面に関して、ハーンの目はかなり厳しいものになっていた。

そうしたなかで、*On Poets* において、ハーンが高く評価し、批判を加えていないバイロンの詩もみられる。“Darkness” がそれである。本稿では、その詩に焦点を当て検討を試みたいと思う。

II

それでは“Culling from Byron”において、ハーンが「バイロンの最も賞賛すべき短詩の一つ」（564）とする “Darkness” についての箇所をみてゆきたい。これは、太陽が突如消滅してしまったらという奇妙な空想をもたらす夢想の詩である。

I had a dream, which was not all a dream.
The bright sun was extinguish’d, and the stars
Did wander darkling in the eternal space,
Rayless, and pathless, and the icy earth
Swung blind and blackening in the moonless air;
Morn came and went— and came, and brought no day,
And men forgot their passions in the dread
Of this their desolation; and all hearts
Were chill’d into a selfish prayer for light:

And they did live by watchfires— and the thrones,
The palaces of crowned kings— the huts,
The habitations of all things which dwell,
Were burnt for beacons. (565)

（訳）

我　夢を見つ、否そは全く夢にはあらず。
輝ける太陽は消滅し、星々は永遠の宇宙を
弥増す闇の中　光も失せ起動もなく彷徨ひぬ。
凍て附く大地は　闇雲に打ち震へ
月の掛からぬ中天に黯ずみたり。
晨きたりて過ぎ去りぬ—再び晨来たれど昼にはならず
人々かくも荒涼たる光景を恐るる念をも
忘れ果て心冷たく
光求むる身勝手な祈りとなるばかり。
人々篝火の側にのみ住めり—
王冠を戴きし王たちの宮殿も　玉座も
居住せし総ての者どもの家も小屋も
篝火のために燃されぬ。

（『黯黒』第１行～13 行　＊本稿における詩の訳は、恒文社、１９８９、『ラフカディオ・ハーン著作集第六巻　文学の解釈Ｉ』、第十章（金沢豊訳）より引用）

この詩の始まりについて、ハーンは「印象深い始まり」とし、“darkling” という語について、以下のように説明している。

> ... it is the participle of the verb “to darkle,” and conveys the idea of movement in darkness better than any other word in the English language. Notice also the fine alliteration in the fifth line of the words “blind and blackening” — blackening having the same meaning of motion in darkness as the participle darkling in the third line. (565)

ここで描かれている暗闇、暗黒がいかに深いものであるか、ハーンは、こうした解説で理解させようとしている様子がうかがえる。そして、バイロンの時代には薪を燃やす以外には照明法はあり得なかったことも語られる（565-566）。

続いて、真の暗黒が動物界をどのようにするか、また、暗黒が続けば飢饉となり、食人行為さえ起るであろうことが描かれたくだりが紹介される。そして「しかしこの悪夢の最も醜悪なくだりは、ただ二人の人間を除いて、大都の全ての住人が死に絶えてしまった後で、この二人が出会い、死ぬところを描いた逸話である」（566-567）として、次の場面が示される。

But two
Of an enormous city did survive,
And they were enemies: they met beside
The dying embers of an altar-place
Where had been heap'd a mass of holy things
For an unholy usage; they raked up,
And shivering scrap'd with their cold skeleton hands
The feeble ashes, and their feeble breath
Blew for a little life, and made a flame
Which was a mockery; then they lifted up
Their eyes as it grew lighter, and beheld
Each other's aspects— saw, and shriek'd, and died—
Even of their mutual hideousness they died,
Unknowing who he was upon whose brow
Famine had written Fiend. (567)

（訳）

曠い都に　生き残れるは
ただ二人。
彼等互いに敵同士　出会ひし処は
祭壇の際　消えかかりし燈明の元。
聖なる品々　聖ならざる用に供せんと
小山の如く積まれたり。彼等　身震ひしつつも
冷たき骨の両手もて　生温き灰をば
引掻き廻し　掻き集めたり。纔かばかりの火を
掻きたてんと　微かな息を吹き掛けて　上る炎は
嘲ぞ。明るくなるにつれ　眼を上げて
互いの貌を窺へり。
—見たり、叫べり、死せり—
彼等死せるは　余の醜さ故に
飢餓が鏤附けし額の悪魔をも
対手が誰とも　知らずして
（『黯黒』第 55 行～ 69 行）

ハーンは「飢えた人間どもは、長期にわたる飢餓の苦しみゆえ、悪魔か悪鬼のごとく醜く恐ろしい容貌になってしまった。最後の二人となった者も、互いに相手を誰であるか認めることすらなく、互いの姿を見ただけで恐ろしさのあまり死んでしまった」（567）と、このくだりが示すところを述べる。そして

> In all English poetry there is nothing of more horrible strength than this poem of Byron's, and it marks a new departure. The eighteenth century classical school did not allow the obtrusion of very horrible details in descriptive verse of any sort; indeed, it objected to any strong display of emotion. But the romantic school returning to older traditions, arguing that the proper function of poetry was to stir the emotions, and that the emotion of fear was one to which literary art had a perfect right to appeal. (567)

と、「感情を揺り動かすことが、詩本来の役割であり、恐怖の感情も文芸が訴えかけるべき完全な権利を有するものだ」というバイロンの詩とロマン主義の主張を首肯していると思われるハーンがいる。この詩については、ハーンによる批判が見当らない。*A History of English Literature* においても、"Darkness" については

> It is perhaps the best of all the shorter pieces produced by Byron— it is the fanciful picture of what might have happened in this world if the sun suddenly went out. It is very terrible. (470-471)

といった評価が示されている。

Ⅲ

それでは、なぜハーンは "Darkness" をそれほど評価しているのであろうか。先にみたように、「バイロンによるこの詩ほど恐るべき効果を有するものは、どんな英国詩にもなく、それは新たなる出発をなすものだ」とハーンは説く。そして、そうしたところにこそ、古典派に対するロマン派の意義があると主張しているようにも思える。

ハーンが同詩を称賛する理由として、その詩にケルト的要素をみることは出来ないであろうか。

まずハーンにおけるケルト的な面についてであるが、「ハーンとイェイツ（William Butler Yeats）を同じ視野の中に並べてみることは納得のいくことではあるまいか」（Murray 12）と示唆されているように、ハーンはイェイツとともに、そのアイルランド、ケルト的背景がしばしば指摘されてきている。ハーンは東京大学の講義において「イェイツが自ら、南アイルランドの農民たちから多くの妖精物語や伝承を集め、妖精文学の人気を取り戻した」ことを紹介している (*On Poetry* 253)。また、二人の間には、書簡のやり取りもみられたのである (*A Fantastic Journey* 35)。

そして、本ジャーナル前号における拙稿の最初でみたように、ハーンは日本の浦島伝説を殊のほか好んだ。そこには、ケルト世界が色濃く残るアイルランドのオシン伝説と浦島との類似をあげることも出来ようかと思う（オシン伝説については、*Myths & Legends of the Celtic Race* 228-233、*Celtic Myth and Legend* 223-226 参照。また「ハーンが浦島伝説とオシン伝説の類似から、前者を好んだのでは」については、『浦島コンプレックス—ラフカディ

オ・ハーンの交友と文学』参照)。また、「浦島伝説は、アイルランドのオシン伝説が、日本に伝播したもの」とする指摘も、三宅忠明によってなされている。

こうしたところから、ハーンにおけるケルト性とでもいうべき面がみてとれよう。

次に、バイロンによる“Darkness”に目を向けることにする。この詩は、「突然太陽が消失したならば・・・」という奇想天外な設定がなされている。ケルトのオシン伝説も、異界というべき常若の国で年をとることなく過ごしたオシンが、帰郷すると厖大な歳月の経過が襲いかかり、老人になってしまうという、やはり奇想天外な話である。「ケルトの神話は不可思議な話に満ち満ちている」(井村　28)とされるが、“Darkness”はそうしたケルト世界を彷彿させるといえようか。そうしたところから、ハーンも *A History of English Literature* において、「バイロンは、多分にケルト的だ」“. . . he had much more of what we might call the Celtic than that of the English temperament.”(464)とみているのではなかろうか。

また、上杉文世による「・・・バイロンの詩の本質を『ケルトの反逆』‘Celtic Titanism’と喝破したM・アーノルドの慧眼は、ゲーテの『オイフォリオン像』と共に、バイロン批評の白眉として双璧をなすものと言えよう」(351)との指摘もみられるのである。

そして、ケルトのオシン伝説は(浦島伝説も)、不可思議さとともに「潜在的SF要素」とでもいうべきものを含んでいるといえないであろうか。

SFの定義ないし概念について『英米児童文学』では、「科学小説の先駆者—H.G.ウェルズ」において

> ・・・科学小説(SF)においては、科学的なまたは疑似科学的な仮定に基づいた未来の推理が行われる。したがって、それらのテーマのうちでもっとも人気のあるのは、宇宙飛行、タイム・トラベル、宇宙人との出会い、人類の心理的または生物学的な変化と生活形態の変化、社会生活状況にあらわれたテクノロジーの影響などである。(91)

とされている。これはSFというジャンルの一応のラインを示すものではあるが、SFとみなされる作品はこの枠にとどまるものばかりではなかろう。本稿では、こうした概念を踏まえつつも、科学的要素が希薄、あるいは、あえて伏せられたストーリーや内容をもつもの、しかし浦島伝説のように、今日的視点からみれば相対性理論を連想させるストーリー(これについては後で検討する)、即ち「潜在的SF的要素」というべきものを含む作品、物語等も、その範疇に入るものとして検討を試みたい。そうすることにより、SFが登場してくる背景、過程に目を向けることが可能になると思われるからである。

現代的視点からすれば、周知のアインシュタインによる相対性理論をオシン伝説、浦島伝説ともに想起させるものといえる。同理論では「時間は必ずしも絶対的なものではなく、光速に近い速度で移動すれば、時間の経過は遅くなる」とされるからである(『NHKアインシュタインロマン第2巻　考える+翔ぶ』参照)。もし、オシンや浦島が地球外高等生物

によって、光速ないしそれに近い速度の宇宙船等で、宇宙の彼方や異世界へ連れて行かれたのだとしたら、両伝説のようなこともありえるのではないか・・・。二つの伝説はこうした連想をも誘発させるものを含んでいる。

バイロンによる“Darkness”も「潜在的 SF 要素」を含んだ作品といえるのではないか。太陽の消失というところには、宇宙的な視点がみえる。そして、消失した太陽により、世界はとてつもない変容を余儀なくされる。暗黒のなかで、人間は寒さや飢えに苦しみ、食人さえ起る。人が人としての姿を失った完全なる異界とでもいうべき様相を呈する。そうした恐怖の世界が展開されるなか、人間も悪魔か鬼かという容貌となり、最後の二人となった者も、互いの容貌の恐ろしさに耐えかねて死んでしまう。

こうした“Darkness”と重なるものを感じさせる SF 作品はないであろうか。

シェリフ (Robert Cedric Scheriff) 作白木茂訳『ついらくした月』（原題 *The Hopkins Manuscript*）は、月が大西洋に墜落するという話である。それほどの大災害に見舞われた人類であるが、復興に立ちあがる。しかし、大西洋を埋め尽くした月に豊富な資源が埋蔵されていることが分かると、各国は領有権を主張し戦争が起る。そして、災害ではなく自らの欲望により、人類は滅亡への道を歩いてゆく。ここには“Darkness”と重なる宇宙的規模の天変地異と、それを契機として露わになる人間の醜さが示されている。SF とされる『ついらくした月』と“Darkness”は、その内容において重畳したものをもつといえようか。

また、ウェルズ (Herbert George Wells) による『タイム・マシーン』*The Time Machine* は、19 世紀の科学者がタイム・マシーンを発明し、遥か未来へ赴くが、そこは、姿形は美しくとも勇気や逞しさを失ったエロイと、地中に棲み、夜の闇に乗じてエロイを襲い食する、醜い怪物のようなモーロックという二つの人種が存在する末期的世界でしかなかった、という話である。

ここみられる希望なき末期的世界で、食人という行為まで犯してしまう人間の姿は“Darkness”と重なってくる。また、タイム・トラベラーとなった科学者が行き着く遥か未来も、“Darkness”に描かれている太陽が失われた世界も、ともにいわば別世界あるいは異界といってよい場所である。

そして *The Time Machine* は、時間旅行ということが大きな要素であるが、時を越えたところにある異界という点では、ケルトのオシン、浦島伝説と繋がるものを感じさせる。このように考えてくると、*The Time Machine* は、ハーンとの接点も感じさせる。“The Dream of a Summer day”において、ハーンには浦島伝説を強く好む様子が見られたこと先述のとおりだからである。食人という点からも、ハーンの作品に目を向けるならば、“Jikininki” *Kwaidan* という作品があり、生前物欲が強かった僧侶が、死後、遺骸を貪る食人鬼（じきにんき）に身を落とす話がみられる。こうした箇所に注目するならば、*The Time Machine* の SF 世界とケルト的背景を感じさせるハーンの世界は、重なりあってくるかのように思える。

さらに、“Darkness”とオシン、浦島伝説を並置するならば、絶対的と思われている太陽と時間について、その絶対性が崩れる、絶対性を相対的なものとみる、あるいは、相対的

にするところから登場する別世界ないし異界、そこで繰り広げられる恐怖、こうしたあたりに、日常的、常識的世界から離脱、逸脱する志向がうかがえよう。そして、そうした要素はSF作品を構成するところのものといえるのではないか。そう考えることが出来るのであれば、“Darkness”も「潜在的SF要素」あり、とみることが出来ようか。

そして、そうした世界とハーンが志向するところのもの、彼のバックボーンとは繋がり、重なりが感じられるのである。だからハーンは、バイロンの“Darkness”について、評価や共感を示しているのではなかろうか。

SFという観点から、*The Time Machine*のウェルズに目を向けるならば、彼のもう一つの作品『モロー博士の島』*The Island of Doctor Moreau*も取り上げておきたい。これは、モロー博士という狂気の科学者が、動物を人間に変えようと実験を繰り返す話であるが、「この作品は、メアリー・シェリー(Mary Shelley)の*Frankenstein*を意識したものである」との指摘が、マイケル・フライド(Michael Fried)によってなされている（133）。*Frankenstein*は、若い科学者が理想的な人間を造ろうとするが、怪物のような姿になってしまった人造人間が、科学者への復讐を試み、幾多の悲劇が惹き起こされるという物語である。従って、*The Island of Doctor Moreau*が*Frankenstein*と同じ系譜にあることは否めない。

*Frankenstein*という作品は、メアリー・シェリーがロマン派の詩人P.B.シェリー(Percy Bysshe Shelley)と駆け落ちし、さらにバイロンなども交えての集いの中で、メアリーにより手がけられてゆく。こうした経緯については、ハーンも*A History of English Literature*のなかで触れている（477-478, 519-520）。そして、*Frankenstein*では人造人間を生み出す過程が具体的に示されていないことについて、クロスビー・スミス(Crosbie Smith)は、「この瀆神のサスペンスを著しく損なう根本的な弱点である」としながら、「人造人間の創造過程が詳らかにされていないのは、ロマン主義者には啓蒙時代の理性が脅かし破壊しようとしているようにみえた、驚異と不思議の感覚を守るための手段であった」（52-55）と指摘している。

こうしたところから、*Frankenstein*については、人造人間の登場にSF的要素を、作品の背景にロマン主義を認めることが出来よう。

*Frankenstein*については、ハーンもまた注目、評価している。*A History of English Literature*には、以下のような記述がなされている。

> . . . Mrs. Shelley (*Frankenstein*), are immortal because . . . wonderfully didactic. (755)

> Her story is the story of the young student called “Frankenstein,” who has discovered how to make a man by chemistry: he tries to make a very beautiful man, but he only succeeds in making a very frightful monster. The story has been especially successful as a moral tale; and by its moral it can never die. (519-520)

さらに、同書にてハーンは「怖がらせて楽しむという文学趣味は、バイロンの時代か、それを少し過ぎる頃まで続くが、ゴシック、つまり中世的なものへの憧憬はロマンティシズムの萌芽になり得るものを持っていた」(415) という見解を示している。こうしたあたりから、*Frankenstein* には、人造人間という点に SF 的要素とバイロンに繋がるロマン主義的要素がともに見いだせよう。そして、同作品のロマン主義的側面に注視、評価するハーンもまたみられるのである。

ここで *Frankenstein* の系譜をひく作品も著したウェルズに戻る。ロマン主義を背景にもつメアリー・シェリーの影響が看取されるウェルズは、「古い家庭環境、社会的無関心や迷信、虚偽的な道徳基準といったものからの開放、女性の解放などをテーマに、進化論的法則と科学の進歩をてこにして、その進歩を阻むあらゆる因習からの開放に目を向ける積極的ロマン主義における開放のユートピア文学」(近藤　47-48、下線部筆者) という位置づけもなされている。この見解からすれば、ウェルズについても、SF とロマン主義双方の要素が浮かび上がってくる。

Ⅳ

以上、ロマン主義を代表する詩人といわれるバイロンを介してハーンの如何なる面がうかがえるか、また、そこからどのようなことが看取出来るかについて、検討を試みた。

バイロンの発想、感情の吐露が、それまでにみられなかった世界を示したこと、英文学に「新しい出発」とまで言うことができる画期的な面がみられること等には、ハーンも評価や賛意を送ってきた。しかし、バイロンには詩作に対して周到さがなかったこと、「感情、情熱をもって詩である」とし、辛抱強い自制心が欠如していることについては、厳しく批判していた。また「自制力の道徳的方面と知的方面とは相伴うものだという普遍的な真理」という立場から、モラル的な面についても、ハーンのバイロンに対する視線は厳しいものがみられた。

ハーンという人物に強い倫理観みられることはしばしば指摘されるところであるが (白神「倫理観」等)、バイロンを介してみた本稿においても、それはかなり鮮明に伝わってきたといえよう。

さらに、ハーンにはケルト的様相といったものが包摂されていること、すでにみてきたごとくである。しかし、本稿では、バイロンの “Darkness”、ケルトのオシン伝説、浦島伝説、ウェルズ作 *The Time Machine*、*The Island of Doctor Moreau*、メアリー・シェリーによる *Frankenstein* 等の作品を並置してみることにより、興味深い、意外な流れが読み取れたと思う。それは、「ケルト―ロマン主義―SF」という繋がりを示してくるものであった。ロマン主義は古典主義に対峙するものと理解されており、古典主義をいわば土台としてロマン主義は芽吹いたとするのも一つの見方であろう。しかし、ロマン主義は、じつはケルト世界にその源流をもつとみることも出来るのではなかろうか。

本稿では、その一材料を提示することを試みた。本稿における主張を裏付けるものとして、若き日のバイロンによる *English Bards and Scotch Reviewers* (本ジャーナル前号の拙稿第 36

項にて提示）を再度あげておきたい。ここには'Bard'という語が用いられている。これが「ケルトの（吟遊）詩人」を表すことは *Genius* などの一般向き辞書にも記載されている。さらにハーンによる *On Poets* では、ロマン派詩人ブラウニング (Robert Browning) ついても解説がなされているが、そこには "Abt Vogler" という詩が紹介されている。'Bard' は、その詩においてもブラウニングによって用いられているのである（171 − 172）。よって、ロマン派詩人によるケルト世界への憧憬ないし志向といったものが、こうしたところにもうかがえるといえようか。

Works Cited

＊本稿は前号の続編であるため、前号と重なる文献も示した。

Frost, O. W. *Young Hearn*. Tokyo: The Hokuseido Press, 1958.

Hearn, Lafcadio. *A History of English Literature*. Ed. R. Tanabe, T. Ochiai and I. Nishizaki. Tokyo: The Hokuseido Press, 1953.

------. "Byron." *On Poets*. Ed. R. Tanabe, T. Ochiai and I. Nishizaki. Tokyo: The Hokuseido press, 1941.

------. "Culling from Byron." *Ibid*.

------. "Jikininki." *Kwaidan*. Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1996.

------. *On Poetry*. Ed. R. Tanabe, T. Ochiai and I. Nishizaki. Tokyo: The Hokuseido Press, 1973.

------. "The Dream of a Summer Day." *Out of the East*. Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1996.

Murray, Paul. *A Fantastic Journey*. Sandgate: Japan Library, 1993.

------. Introduction. *A Fantastic Journey*. By Sukehiro Hirakawa. Sandgate: Japan Library, 1993.

Rolleston, T. W. *Myths & Legends of the Celtic Race*. London: CRW Publishing Limited, 2004.

Shelley, Mary. *Frankenstein*. London: Penguin Books Ltd., 2006.

Squire, Charles. *Celtic Myth and Legend*. N. Y. : Dover Publications, Inc., 2003.

Wells, Herbert, George. *The Island of Doctor Moreau*. London: Penguin Classics, 2005.

------. *The Time Machine*. New York: Ace Books, 1988.

Fried, Michael.　遠藤徹訳 「印象派の怪物—H. G. ウェルズの『ドクター・モローの島』」『怪物の黙示録』. Ed. Bann, Stephen. 株式会社青弓社，1997.

Sceriff, Robert Cedric.　白木茂訳 『ついらくした月』. 岩崎書店，1976.

Smith, Crosbie.　遠藤徹訳 「フランケンシュタインと自然の魔力」『怪物の黙示録』. Ed. Bann, Stephen. 株式会社青弓社，1997.

伊野家伸一 「L.Hearn "A Conservative" *Kokoro* にみる 'Duty'」*Persica No.28*　岡山英文学会、2001.

井村君江 「ケルト神話の宇宙観—ドルイドを中心として」『ケルトと神話』. 鎌田東二・鶴岡真弓編著. 角川書店，2000.

上島建吉 「編集後記」『イギリス・ロマン派研究—思想・人・作品』. イギリス・ロマン派

学会（代表　岡本昌夫）編集．株式会社桐原書店，1985.
上杉文世 「バイロンとオシアン詩」『イギリス・ロマン派研究―思想・人・作品』．イギリス・ロマン派学会（代表　岡本昌夫）編集．株式会社桐原書店，1985.
梅本順子 『浦島コンプレックス―ラフカディオ・ハーンの交友と文学』．南雲堂，2000.
NHK アインシュタイン・プロジェクト 『アインシュタインロマン第 2 巻　考える＋翔ぶ』．日本放送出版協会 , 1991.
小泉節子 「思い出の記」『小泉八雲　思い出の記　父「八雲」を憶う』．小泉節子・小泉一雄．株式会社恒文社，1987.
近藤正栄 「英文学にみるロマン主義とその変容」『ロマン主義の諸相　神奈川大学人文学研究叢書（八）』．神奈川大学人文学研究所，1991.
斎藤美洲編著 『イギリス文学史序説　社会と文学』 中教出版社、1981 年。
白神栄子 「倫理観」『ラフカディオ・ハーン研究―愛と女性と―』 旺史社、1993 年
中野節子 「科学小説の先駆者―H. G. ウェルズ」『英米児童文学』．中教出版株式会社，1977.
野中涼 「ロマン派の創作過程」『イギリス・ロマン派研究―思想・人・作品』．イギリス・ロマン派学会（代表　岡本昌夫）編集．株式会社桐原書店，1985.
三宅忠明 「浦島伝説の起源と伝播―アイルランドから日本へ―」『語学センター研究紀要』．岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部 , 2003.